

came to the conclusion that *U. nipparensis* is quite different from *U. pennsylvanica*. So far as my specimens concerned, *U. nipparensis*, compared with *U. sublurida*, *U. pangiana*, and *U. pennsylvanica*, reaches to the utmost growth—attaining up to 30 cm in length and main stalk up to 3 mm in thickness.

\* \* \* \*

筆者は多年前日本の中部本土に可なり頻出する一種の地衣を *U. nipparensis* と命名した。其後本種と全く同一のものが東部ヒマラヤ、ダージーリン、シッキム、ネパール東部、台湾、朝鮮にも産する事が判明した。

外形は *U. pangiana* に似て居るが含有成分はウスニン酸の外にカペラット酸を含み別種である。

Motyka は彼の所謂 Rubigineae 亜節の中で表面が暗色の鉄錆色をして居り、表面に赤味を現わさない 3 種の地衣：*U. sublurida*, *U. pangiana* 及 *U. pennsylvanica* を互によく似たものとして一括した。*U. nipparensis* が *U. pangiana* と外形がよく似て居るが成分が異なる為別種となった。同様に *U. sublurida* (髄 K + 初め黄色より赤色に移る) とも異なるが更に残りの *U. pennsylvanica* との比較も必要となった。そこで *U. pennsylvanica* の確実な標本と比較し、これとは全く異なるものとの結論を得た。尚 *U. nipparensis* はカペラット酸の外にステクチン酸を含むものが時々見付かるがこれは *f. reagens* として品種に入れた。

産地。武蔵日原；富士，大宮口 2 合目 (タイプ産地)；富士吉田，浅間神社；信濃池ノ平—大門峠；富士山中湖畔 (f.)，箱根葦湖 (f.)，甲斐南都留郡忍野村 (f.)，埼玉県秩父郡大滝村赤沢 (f.)，紀州高野山 (f.)。

台湾産：来社，阿里山，溪頭，チヨカクライ，太平山。

朝鮮産：北鮮咸地院 (咸興附近)。

ヒマラヤ地方の産地については Hara: The Flora of Eastern Himalaya I, p. 601 (1966) 参照。

□劉業經：臺灣木本植物誌 AB, 887 頁，臺灣中興大学農学院出版委員会，1972，2000 円。台湾の樹木についてはすでに，金平亮三，李惠林，劉業端氏らのすぐれた本がでてゐる。これらを集大成し，独自の見解でまとめたもので，新名もある。現在よく使われている李氏の本は，種類の見解がやや粗雑であつたのに較べると，最近の研究もかなり取入れられていて，充分とはいえないがかなりよくまとめられている。図はすべて他書からの引用であるが，出典は明らかにしておくべきものである。本郷の井上書店で扱っている。(山崎 敬)